

MMPI 自我強度尺度(Es)の基礎資料

木 場 清 子

(金沢大学医学部神経精神医学教室*)

1 はじめに

臨床心理学や精神医学の分野において、しばしば個人の自我の強さが問われ、それを知る必要にせまられる。しかし、自我の強さとは何であり、また量的にとらえられるものなのであろうか、という疑問もある。これまでに、このあいまいな概念を操作的概念に置きかえて測定しようとする工夫が重ねられ、いくつかの尺度が考案されてきた。それらは自我強度 (Barron, F.), 自我弾力性 (Block, J.), 自我の弱さ (Cattell, R. B.), 予後評定尺度 (Klopfer, B.) などであり、関連論文も多いが、日本人の資料に基づく標準研究はほとんどない。本報告の目的は、Barron の Es 尺度について、われわれの資料から日本人の T スコアを算出することおよび臨床群の結果に若干の考察を加えることである。

Barron, F. (1953) は 33 人の神経症患者に MMPI を実施し、6 カ月間の精神療法の後、治療効果のあった 17 人と治療効果のなかった 16 人に分けて MMPI の項目を分析したところ、68 項目で両群の間に有意差があった。彼は、それらの項目が精神療法に反応する能力、すなわち潜在的な自我の強さを表わしていると考え、Ego strength scale (Es 尺度) と名づけた。

以下に 68 項目を採点方向別に、金沢大学版の番号順にあげる。参考のためにミネソタ版冊子法と日本版として市販されている三京房版の番号を付記する^(注)。最初の番号は金沢版、() 内は原版、文章の終りの番号は三京房版である。

1. True (当てはまる) と答えた場合に採点される項目

- 73 (430) 異性にひかれる (1510)
- 77 (380) わたしのよく知っていることについて、無知なばかげたことを言っていると、わたしはそれを直してやりたくなる (148)
- 101 (36) 自分の健康についてめったに気にやまない (25)
- 131 (51) わたしは人並みに健康である (221)
- 134 (231) 性に関する話が好きだ (821)
- 139 (335) 愛している人をいじめて楽しむことが

ある (1225)

- 147 (270) 外出時、戸じまりなどよくしたかどうかを気にするようなことはない (930)
- 161 (192) 歩くときに、ふらふらよろけることはない (172)
- 200 (458) 子供のころ、わたしに一番身近だった男の人 (父など) は非常に厳格だった (168)
- 213 (208) 異性といちゃついたりするのが好きだ (728)
- 227 (109) 人が偉そうなことを言うと、たとえそれが正しいことでも反対のことをやりたくなる (419)
- 229 (221) 科学が好きだ (811)
- 272 (2) 食欲はおう盛である (12)
- 298 (307) 火はこわくない (1530)
- 303 (421) 家族のなかに非常に神経質な者がいる (151)
- 325 (253) 悪いことをするような人とでも親しくつきあっていける (913)
- 332 (515) わたしの家には必需品 (食物、衣服など) はいつも十分にある (185)
- 377 (234) すぐカッとなるが、またケロリとなる (824)
- 425 (181) 退屈したときには騒ぎたくなる (71)
- 441 (187) 手先が思うように動かないということはない (77)
- 451 (153) ここ数年間、わたしはだいたいのところ体の具合がよい (63)
- 491 (174) 気が遠くなったことはない (624)
- 500 (513) リンカーンの方がワシントンより偉かったと思う (183)
- 544 (95) お寺や教会などによくお参りに行く (45)
- 545 (410) ペテン師 (詐欺師) と勝負して、やつつけることが好きだ (1420)

2. False (当てはまらない) と答えた場合に採点される項目

* 主任 山口成良教授

注) 三京房版の「日本版 MMPI ハンドブック (1969, 1973) に掲載されている Es 尺度の番号には印刷ミスが 3 個ある。

- 7 (209) わたしの罪はゆるされな^いと思う
(720)
- 29 (32) 一つの仕事だけに心を向けていることができないようだ (22)
- 41 (251) 仕事は何も手につかず、まわりのことが何が何だかわからなくなった時期がある (911)
- 54 (488) 神や仏によくお祈りする (178)
- 60 (140) 料理をするのが好きだ (520)
- 61 (22) 発作的に笑い出し (泣き出し) それをおさえられないことがときどきある (122)
- 64 (58) すべての物事が聖書の予言者が言っている通りになっている (228)
- 66 (489) 悲しみや悩みにつきまとわれている人に同情する (179)
- 68 (48) 人といっしょにいるとき、とても変な事が聞えて困る (218)
- 71 (541) わたしの触覚は並はずれて敏感なようだ (191)
- 99 (389) わたしのたてる計画はとても実行がむつかしくて、あきらめねばならないことが多い (1329)
- 110 (559) 真夜中に恐ろしくなることがよくある (171)
- 155 (378) 女の人^がたばこをのんでいるのを見るのはきらいだ (1416)
- 167 (359) 何でもない考えが気にかかって、何日もそれが気になることがある (1229)
- 168 (510) きたないものを見ると胸が悪くなる (1730)
- 172 (43) とときどき目がさめて、ぐっすり眠れない (213)
- 180 (561) 馬に乗るのが大好きだ (1722)
- 210 (554) もし画家だったら子供の絵を描きたい (1612)
- 225 (94) わたしはあとになって後悔することをよくしでかす (他人よりもよく後悔するようだ) (44)
- 228 (494) 便所のようなせまい場所にいるのは怖い (1714)
- 234 (420) とても不思議な宗教的体験をしたことがある (1430)
- 249 (244) わたしの物事のやり方は、人から誤解されやすい (94)
- 266 (236) わたしはとても考えこむたちである (826)
- 267 (334) だれか知っている人をみかけて、その人に会いたくないので道をそらすことがよくある (1214)
- 278 (33) 以前にわたしは非常に不思議な体験をした (23)
- 280 (132) 草花を集めたり、植木を育てたりするのが好きだ (512)
- 287 (341) 音に敏感で困ることがよくある (1211)
- 292 (241) 人に言わないでおきたいような夢をよくみる (91)
- 336 (217) いつも何かをくよくよと心配している (87)
- 361 (187) いつも体が弱っているように感ずる (79)
- 398 (525) ある動物をみるとぞっとする (1815)
- 402 (14) 月に一度ぐらい下痢をする (114)
- 404 (483) キリストは水を酒に変えるというような奇跡をおこなった (173)
- 407 (100) いろんなふうに考えられる問題なので、どうにも決心がつかなかったことがある (410)
- 412 (34) しよっちゅう咳がでる (24)
- 438 (349) わたしはとても変わった考えをもっている (1219)
- 440 (544) 大抵いつも疲れている感じだ (194)
- 454 (548) ストリップ・ショウなどは見に行かない (198)
- 469 (82) 議論をするとすぐ負けてしまう (322)
- 480 (555) とときどき自分の体がバラバラに碎けてしまいそうな感じがする (1619)
- 481 (62) 体の一部がカッとほてったり、ヒリヒリしたり、ムズムズしたり、だるくなったりすることがよくある (32)
- 496 (384) 自分のすべてを打ち明けることはわたしにはできない (1324)
- 529 (261) わたしが画家だったら、好んで花の絵を描くだろう (921)
- 以上、True 25項目、False 43項目の68項目である。

2 金沢大学版による標準資料

金大版 MMPI は、ミネソタ版から多田治夫 (1959) が邦語版 (集団法) を作成し、後に田中富士夫 (1964) らが字句の一部を改訂してカード式 (個人法) に直したものである。本報告の資料は、個人法の標準化の際に、

正常人の被検者として北陸地方（石川県、富山県および福井県）に在住する16歳以上の男女275名に実施したMMPIのファールから、教育歴のはっきりしている男子134名、女子100名についてEs尺度を採点して用いた。年齢、教育年数およびEs得点の平均と標準偏差は表1に示したとおりである。Es得点の分布状態をみるため、図1にヒストグラムで表わした。

表1 正常被検者の年齢、教育年数およびEs得点

性 別		男 子	女 子	合 計
人 数		134	100	234
年 齢	平 均	28.27	29.58	28.83
	標準偏差	11.17	12.67	11.80
教育年数	平 均	12.46	11.76	12.18 $P < .05$
	標準偏差	2.73	2.16	2.54
Es 得点	平 均	41.99	39.10	40.75 $P < .001$
	標準偏差	6.18	5.40	6.02

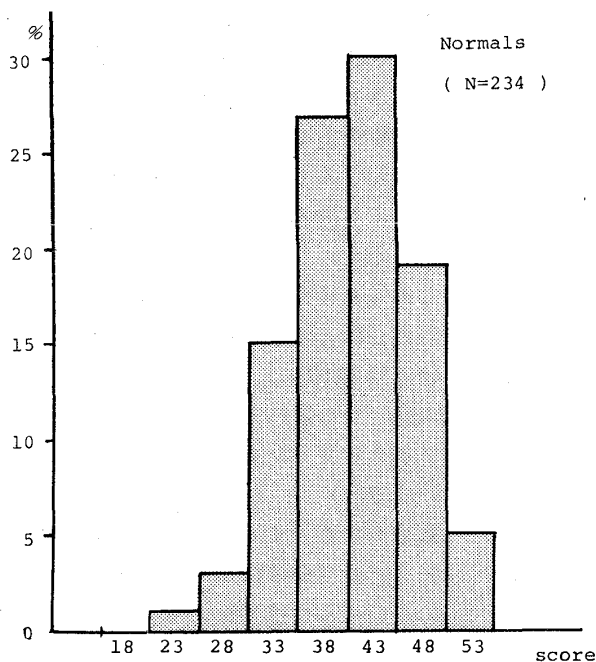


図1 正常群のEs得点分布

年齢は男女間に差はない。教育歴は男女とも尋常小学校卒から大学医学部卒にわたっているが、平均年数では男子の方が女子より0.7年（約8.5カ月）高い。Es得点は、女子が男子に比べて有意に低く、この結果はHathaway, S. R. & Briggs, P. F. (1957)やTaft, R. (1957), 鈴木正義（1968）らの所見と一致する。

Es得点と年齢および教育歴との関係を見ると、Es得点と年齢との間に相関はなかった（ $r = -.089$ ）が、Es得点と教育年数との間に有意な正相関（ $r = +.219$, $P < .001$ ）が認められた。このことは、女子が男子より教育年数が低いことおよびEs得点が低いことと関係

があるものと思われる。次に、Es得点（粗点）をTスコアに換算した値を男女別に表2で示す。

表2 Es得点のTスコア換算表

粗点	T ス コ ア		粗点	T ス コ ア		粗点	T ス コ ア	
	男	女		男	女		男	女
12	99	100	31	68 (71)	65 (64)	50	37 (41)	30 (35)
13	97	98	32	66 (70)	63 (63)	51	35 (39)	28 (33)
14	95	96	33	65 (68)	61 (61)	52	34 (38)	26 (31)
15	94	95	34	63 (67)	60 (59)	53	32 (36)	24 (30)
16	92	93 (88)	35	61 (65)	58 (58)	54	31 (34)	22 (28)
17	90	91 (86)	36	60 (63)	56 (57)	55	29 (33)	21 (27)
18	89	89 (85)	37	58 (62)	54 (55)	56	27 (31)	19 (25)
19	87	87 (83)	38	56 (60)	52 (53)	57	26 (30)	17 (24)
20	86	85 (82)	39	55 (59)	50 (52)	58	24 (28)	15 (22)
21	84 (88)	84 (80)	40	53 (57)	48 (50)	59	23 (26)	13 (20)
22	82 (86)	82 (79)	41	52 (55)	46 (48)	60	21 (25)	11 (19)
23	81 (84)	80 (77)	42	50 (54)	45 (47)	61	19 (23)	9 (17)
24	79 (83)	78 (76)	43	48 (52)	43 (46)	62	18 (22)	8 (16)
25	77 (81)	76 (74)	44	47 (51)	41 (44)	63	16 (20)	6 (14)
26	76 (80)	74 (72)	45	45 (49)	39 (42)	64	14 (18)	4 (13)
27	74 (78)	72 (71)	46	44 (47)	37 (41)	65	13 (17)	2 (11)
28	73 (76)	71 (69)	47	42 (46)	35 (39)	66	11 (15)	0 (9)
29	71 (75)	69 (68)	48	40 (44)	34 (38)	67	10 (14)	(8)
30	69 (73)	67 (66)	49	39 (42)	32 (36)	68	8 (13)	(6)

()内の数値はAn MMPI handbook から上下を逆に計算し直して転載したものである

換算されたTスコアは、Dahlstrom, W.G. Welsh, G. S. & Dahlstrom, L. E. がAn MMPI handbook, Vol. 1 (1972)に掲載している数値とかなり違っている。われわれのデータに比べてアメリカ人のEs得点は高いものが多く（Barron: 41.9～52.7, Hathaway & Briggs: 40.2～44.3, Philip, H.: 49.9），前出の鈴木が明らかにしている数値（39.1～41.1）とわれわれのデータは似通っている。このような母集団の違いによる平均得点の差や標準スコアの違いは、Es尺度に限られたことではない。一つの構成概念を尺度として使用するためには、民族性や文化を共有する母集団における標準化研究が不可欠である。

3 臨床資料について

被検者は金沢大学医学部附属病院神経科に通院または入院中の患者である。Es得点はMMPIから採点し、年齢、教育年数とともに表3に示した。精神分裂病172名、神経症170名のEs得点の分布状態を表わすヒストグラムを、それぞれ図2と図3で示した。

表3 臨床群の年齢、教育年数およびEs得点

診 断	性 別 (人 数)	精 神 分 裂 病			神 経 症			
		男 (106)	女 (66)	合 計 (172)	男 (90)	女 (80)	合 計 (170)	
年 齢	平 均	24.64	24.53	24.62 ^a	31.10	31.75	31.41 ^b	a-b***
	標準偏差	7.71	7.76	7.70	11.66	13.41	12.48	
教育年数	平 均	12.25	12.11	12.19 ^c	11.83 ^d	10.97 ^e	11.42 ^f	c-f**
	標準偏差	2.23	2.31	2.25	2.68	2.24	2.51	d-e*
Es 得点	平 均	37.04 ^g	32.55 ^h	35.31	36.83 ⁱ	32.58 ^j	34.81	g-h***
	標準偏差	6.87	6.97	7.22	5.75	6.37	6.40	i-j***

*: $P < .05$, **: $P < .01$, ***: $P < .001$

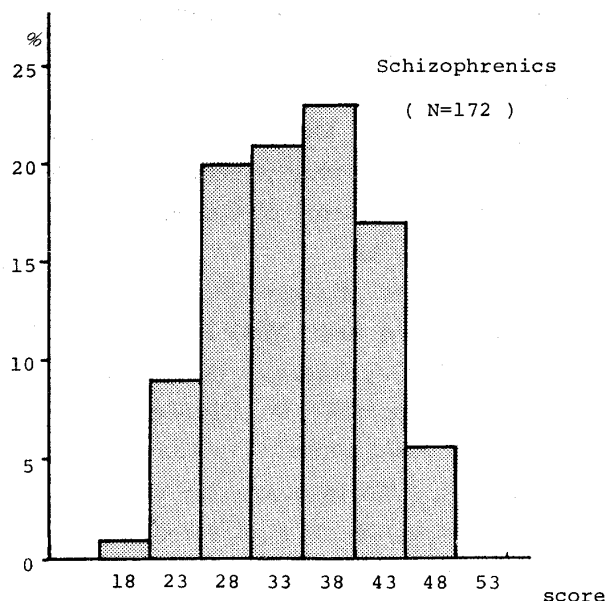


図2 精神分裂病群のEs得点の分布

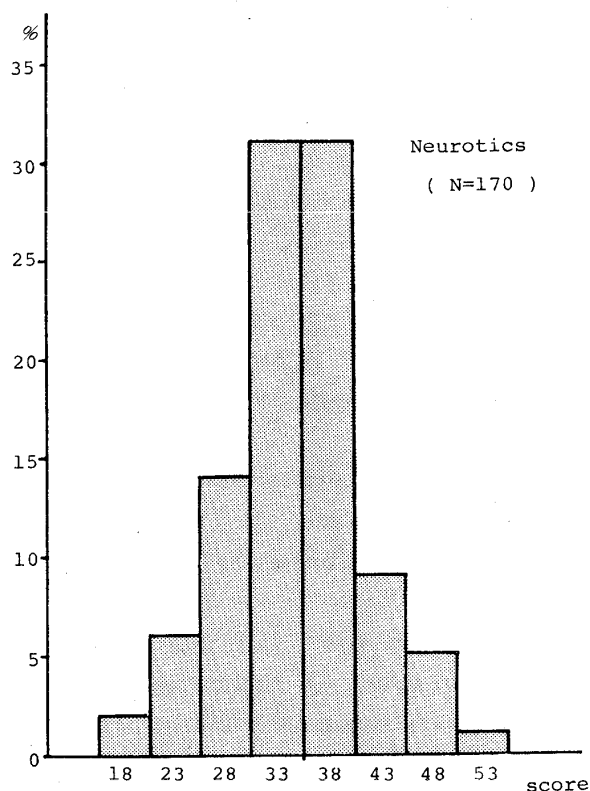


図3 神経症群のEs得点の分布

平均年齢ではそれぞれの群に男女差はないが、精神分裂病群が神経症群より若くなっている ($P < .001$)。教育年数は精神分裂病群が神経症群に比べてやや高く ($P < .01$)、神経症群の中では男子の方が女子より高い傾向を示している ($P < .05$)。

Es 得点をみると、両群ともに性差があり、いずれも男子が高い ($P < .001$)。精神分裂病群と神経症群の間に有意差は認められないが、平均点でわずかに神経症

群の方が低くなっている。正常群の値(表1参照)と比較すると、正常群が最も高く、次いで精神分裂病群、神経症群の順となり、この傾向はすでに他の研究でも指摘されている(小川捷之 1965, 鈴木 1971)。また、正常群と精神分裂病群との間および、正常群と神経症群との間にはいずれも有意差 ($P < .001$) が認められ、文献的にも Es 尺度は正常者と精神科患者を弁別すると報告されている (Taft 1957, Gottesman, I.I. 1959, 鈴木 1971)。しかし、患者群の中では精神分裂病群と神経症群の間に有意差が認められるとするものや差がないとするもの、また精神分裂病群が神経症群より Es 得点が高いという報告や逆に低いという報告があり、さまざまである。この混乱の原因として、研究対象である精神分裂病群の病型や症状の重篤度の違いが考えられる。さらに、精神分裂病者の主観的な自我機能の障害が神経症者のそれより少いことがあげられよう。これについては、Klopfer, B. (1954) の「自我の強さが減少していく過程」(図4)が参考になる。彼は自我の強さの程度を知る要素として、自我防衛と現実吟味の障害の程度をとりあげた。自我防衛は主観的に感じられる障害であ

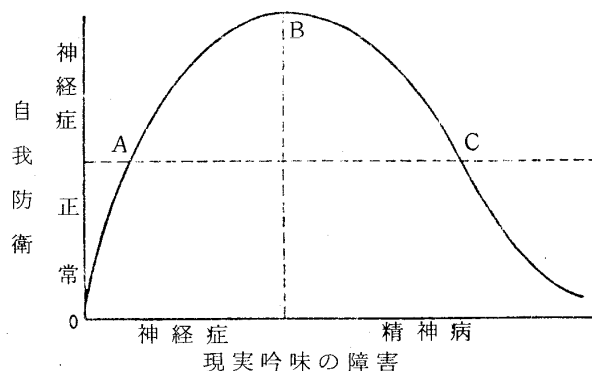


図4 自我の強さの減少していく過程 (Klopfer, B. 1954)

り、現実吟味は客観的に認められる現実把握能力であるとされる。図4の説明によると、神経症段階(A~B)では現実を正確に把握する能力が少しずつ低下し、主観的障害(自我防衛)が強く感じられる状態である。これに対して精神病の段階(C以後)になると自我機能全体が崩壊し始め、現実吟味力も著しく障害されるので意識的な自我防衛の必要がなくなり、主観的な障害は減少していくと考えられている(B~Cの段階は境界領域)。

Es 尺度は質問紙法であり、被検者の自己評価に拠っていることから、精神分裂病者は主観的に感じる自我機能の障害が神経症者より低いため、Es 得点が神経症群より低くならないと考えられる。

最後に、Es 得点と年齢、教育年数および知能との相関を調べた。正常群、神経症群、精神分裂病群のそれぞ

れの相関係数は表4のようになった。

表4 3群のEs得点と年齢, 教育年数, 知能との相関

	群	年 齢	教育年数	知 能 ^①
Es	正 常 群(N=234)	-0.089	0.219***	
得	神 経 症 群(N=170)	0.110	0.030	
点	精神分裂病群(N=172)	0.014	0.224**	0.279*

①: 94人のWAIS-FIQとの関係

*: $P < .01$, **: $P < .005$, ***: $P < .001$

Es得点と年齢は3群とも無相関であったが, 教育年数では正常群 ($P < .001$), 精神分裂病群 ($P < .05$) とともにEs得点と正の相関が認められ, 従来の研究を支持した (Tamkin, A. S. & Klett, C. J. 1957)。知能については, 精神分裂病群172名のうち, WAISを実施してある94名について調べたものであるが, Es得点とIQとの間に有意な正相関 ($P < .01$) が認められた。この所見も, これまでに報告されている結果と一致する (Barron 1955, Tamkin & Klett 1957, Adams, H. B. & Cooper, G. D. 1962)。

以上の結果から, Es得点は年齢とは関係しないが, 教育年数や知能水準と正の相関があること, ならびに平均得点で男女間に差のあることが確かめられた。また正常群と精神科患者群とを弁別し得るが, 患者群のなかで神経症と精神分裂病とを区別することができないことも明らかとなった。

(本報告に際して, 正常被検者の資料の使用を快く承諾下さり, さらに親切な助言をいただいた, 金沢大学文学部心理学教室の田中富士夫教授に深謝いたします。)

引 用 文 献

- Adams, H. B. and Cooper, G. D. 1962 Three measures of ego strength and prognosis for psychotherapy. *Journal of Clinical Psychology*, 18, 490-494.
- Barron, F. 1953 An ego-strength scale which predicts response to psychotherapy. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 327-333.
- Dahlstrom, W. G., Welsh, G. S. and Dahlstrom, L. E. 1972 An MMPI handbook, Vol. 1:

Clinical Interpretation (A revised edition). University of Minnesota Press. MINNEAPOLIS.

Gottesman, I. I. 1959 More construct validation of the Ego-Strength scale and psychotherapy outcome. *Journal of Consulting Psychology*, 23, 342-346.

Hathaway, S. R. and Briggs, P. F. 1957 Some normative data on new MMPI scales. *Journal of Clinical Psychology*, 13, 364-368.

Klopfer, B., Ainsworth, M., Klopfer, W. and Holt, R. 1954 Developments in the Rorschach technique, Vol. 1 World Book. NEW YORK.

小川捷之 1965 自我の強さ (Ego strength) の測定に関する研究 —その1— 東京教育大学教育学部紀要, 11, 107-122.

Philip, H. 1964 Further evidence on the ego strength scale as a measure of psychological health. *Journal of Consulting Psychology*, 28, 90-91.

鈴木正義 1968 自我の強さの二つの測度の関係についての検討 —バロンのEs尺度とクロッパのRPRS— 北海道教育大学紀要 (第一部C), 19, 42-55.

鈴木正義 1971 自我の強さの二つの測定法に関する研究 北海道教育大学紀要 (第一部C), 22, 83-92.

多田治夫 1959 MMPI 邦語版の作成と大学生群の結果 金沢大学法文学部論集, 哲学史学篇, 7, 137-172.

Taft, R. 1957 The validity of the Barron ego-strength scale and the Welsh anxiety index. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 247-249.

Tamkin, A. S. and Klett, C. J. 1957 Barron's ego-strength scale: A replication of an evaluation of its construct validity. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 412.

田中富士夫 1964 MMPI 邦語版標準化の試み (中間報告) —MMPI 金大版の改訂とその資料— 金沢大学法文学部論集, 哲学篇, 12, 71-97.